

んだ様な農村のタルカッドに着く。

この村落の背後にはコウベリ川の右岸から移動してきた河畔砂丘が迫っている。コウベリ川の水源地は西ガーツ山脈の比較的雨量の豊富な場所にあるため、半乾燥地域を流れる川としては流量は大きい。しかし隆起準平原上を流れるのだから、河畔の沖積地の巾は狭く限られている。しかしタルカッドの砂丘は高さが20〜30mもあり、その占める面積もかなり大きいのだから驚きである。砂丘は花崗岩質の白い細砂から成り、砂丘表面は薄いがもはや赤褐色に酸化されている。砂丘は川の右岸すなわちこゝでは東側だけにみられる。その形成原因をめぐってカレッジ講師のケンパナ氏とペール氏が侃々諤々の議論を始めた。片や南西モンスンの影響だと云い、片や河道が西に移動して旧河道が東に遺された所為だと云う。双方の原因とも両立すると思うのだが、互いに自説を守ってゆずる様子はなかった。

砂丘の頂陵から西に少し降った所に、12世紀の右造のヒンズー教寺院が砂に埋もれている。14〜15世紀に自然に埋まり、現在は掘りおこされて建物の上半部が顔を出している。中央アジアのロブノール付近の砂丘に埋もれた樓閣の廢趾もかくやと想いをめぐらす程に印象的な風景である。砂丘はその後安定して低木や高木がまばらに生えている。その内の一つ、肉厚の広い葉のむらがる蔭に、例の三日月型の独特の莢をみつけた。カシューナッツが砂丘に生える植物の実であることをこの時始めて知った。

イスタンブールとユスキュダル

正井泰夫

1970年4月初旬、ヨーロッパへの旅の途中、イスタンブールとユスキュダル(ウスクダラ)に立ち寄った。「アジアへの門戸」を見なかったからである。

テヘランから飛行機でアナトリアの上空を飛ぶと、まだ雪をいただいた高山が、赤茶けた大地の中に聳えているのが見える。赤い屋根の多いイスタンブールに近づくと、風景は地中海式に変わる。イスタンブールの空港は、テヘランの悠々として尊大な感じとは違って、地中海の華やいだ雰囲気一杯であった。

着いてすぐ、ボスポラス海峡を渡ってユスキュダルへ。20人乗りの小型船で渡ったのだが、行先がÜsküdar と書いてあったので、「ユスキュダル？」と聞いて、とび乗ったのである。

モスクの聳えるユスキュダルの波止場は、情緒が一杯である。だが、思っていたよりはるかに近代的で、豊かさを感じた。ここは、アジアの端なのである。だが、そこで見たものは、アジアの端ではなくて、私にはヨーロッパなのであった。少なくとも、東アジアや東南アジアで感じられる控え目の対人関係はあまりなくて、明るく、そして自己主張の強い西洋の感じで一杯なのである。

街の写真をとっていたら子供が寄ってきた。子供の数はどんどん増えて、やがて20人を越した。写真をとったら大喜びで、いろいろなゼスチャーをしてくれる。子供たちの顔は、どうみてもヨーロッパ人に近い。アリアン系のイランよりも、この人たちの方がよほどヨーロッパ的である。

ボスボラス海峡の、そのあまりにも美しい景色を見ていると、多くの人が地中海に憧れる気持ちがよく分る。ここは青森湾と同じ緯度だというのに、どうしてあのように明るいのだろうか。

イスタンブール側へ戻って、歴史を秘めた旧市街を歩く。木造の家はどんどん煉瓦の家建てかえられている。煉瓦の家は、それほど立派なものばかりでないのに、色彩が明るく豊富なので、南ヨーロッパを感じさせる。狭く、瓦礫の多い坂道でも、いかげんではあるが歩道がついている所が多く、その点などでもヨーロッパ的である。市街をとりまく囲郭は、コンスタンチノーブル最後の時のオスマントルコの攻撃によって大きな破壊を受けたのであるが、今はその後の歴史の流れの中で破壊が進行している。相当数の人たちが、廃墟のような城壁を利用して住んでいる光景などは、日本では全く見られない景観である。

街には大声を張りあげて品物を売る男たちが行く。そして、馬が荷車をひいて走る。だが、それらをおおいやすくすように、自動車走り回る。トルコ服より洋服が多くなり、中心商店街を歩く人たちの感じは、パリにそっくりである。有名なバザールも、中味はずい分と近代的で、もうアラビヤナイトの時代は過ぎ去ってしまったようである。東アジアからの旅行者にとって、イスタンブールは「古きよきヨーロッパ」であったのである。

毛 沢 東 の 写 真

内 藤 博 夫

昨年10月、木曾の親戚の法事に出席したついでに漆器の産地として知られている木曾郡檜川村大字平沢というところを訪ねてみた。平沢は木曾の山中を流れる奈良井川の河谷にあって、旧中仙道に沿って発達した人口1,900人足らずの集落である。中央線木曾平沢駅を下車して部落に入